

勇者。パーティーを追放された商人、無限の黄金を手に入れる

須崎正太郎

【目次】

第一章 パーティーを追放されたので魔王と手を組み逆襲します

第二章 何度も勇者を倒していたら王様が出てきて反逆罪とか言ってきました

第三章 王国軍が攻めてきたのでやっぱり最後まで金の力で戦います

番外編SS1

番外編SS2

あとがき

注) 本作品データは「縦書き」「ルビあり」等での表示を前提に制作されています。ご覧になる端末、機種の設定を確認、調整の上でお読みください。

第二章 パーティーを追放されたので魔王と手を組み逆襲します

「商人ルークツ！ お前はよ、今日限りでウチのパーティーをクビだ！ ヒヤハッ！」

勇者ドノバンは、実にチャライ感じで、かつ高慢ちきにそう告げてきた。

人口三万を誇るアルバニア王国の首都。

その路地裏の一角にある、薄暗い酒場の中である。

「な、なんだと……？ なんだ。どうして俺がクビなんだ？」

思ってもいなかった解雇通告。

さすがに驚いた俺は、声を荒らげた。

店内では、陽気な顔をした客たちが麦酒をあおりながら、ギヤツハツハツハツと大笑いを繰り返している。俺の叫び声は、喧騒の中にかき消えていくばかりだ。

「知れたことだろ。お前、いま、オレらのパーティーの役に立ってねえじゃん？」

「ぐ……」

言葉がない。

俺の職業は商人だ。パーティーが買い物をするときに値切り交渉をしたり、どの町にどんな道具が売られているかを調べたり、また新しく手に入れた武器や防具を、誰が装備できるのか鑑定したりするのが俺の仕事だ。

けれども、戦闘力は低い。勇者ドノバンはもちろん、パーティーにいる他の仲間たち——戦士や賢者や魔法使いと比べると、俺はモンスターとうまく戦えない。というかモンスターにトドメを刺したことさえない。その上、魔法だって使えない俺は、パーティーの回復役や補助役

としても役に立てていない。それは認める。

けれど。だけれども――

「買い物をするときは、俺の交渉だつて役に立っているだろう？」

「シヨッボい交渉じゃん。てか、安く買い物ができるつて大した仕事じゃなくね？ 金なんか、モンスターを倒せば手に入るんだしょ！」

魔王が作り出すモンスターは、黄金が素材になっている。倒すと、黄金のカケラに変化するのだ。

「だからさ、ルーク。お前はパーティーから出ていけ。勇者のパーティーには商人も必要かと思つて仲間にしたけれど、やつぱりいらなかつたわ。お前にかかる食費や宿代さへム・ダ！ ヒヤハハッ！ じゃ、今日でサヨナラだ。あ、そうそう、ここの酒代はちゃんと払っていけよ。自腹で！」

「そ、そんな。俺はいま、自分の金なんか持っていないぞ」

「それこそなんとかしろよ！ お得意の、交・渉・で！ ヒャーハハハハッ！ じゃあな！」

ドノバンは、勇者らしからぬ哄笑と共に、酒場を出ていった。

な、なんだ、この状況は。

そりや俺は、戦いは苦手さ。

ドノバンが一撃で倒せるようなザコモンスターを相手に、何回も攻撃してかわされたり、逆に反撃されて死にかけるなんてのもしよっちゅうだった。

でも、俺が武器や防具を安く買うことで、ドノバンや仲間たちが助かったこともあったのに。

それなのに、それなのに、この仕打ち……！

俺はあまりの事態に困惑し、数秒間、戸惑って——チラリと、やってきた店員に目をやった。

彼は、無表情のまま、

「葡萄酒^{ぶどうしゅ}二杯で、金貨二枚になります」

ドノバンは、自分の酒代さえ払わずに出ていったのだ。

俺は店員と交渉した結果、翌朝まで酒場の掃除と皿洗いをするようになった。

☆☆☆

「くそが、くそが！ ドノバン！ それでも勇者かよ！ いくら強いからって、あんなのが勇者なんて！ くそが、くそがあ！」

翌日の昼である。

酒場を出た俺は、女連れで路地裏を練り歩いている男どもの横をふらふらと歩きながら毒を吐きまくった。そんな俺を、通行人たちが避けていく。「なに、このひと」「よせ、近付くな」——そんな声ばかりが聞こえる。ちくしょう、世界の全部が敵に見えてくるぜ。

俺はこれからどうすればいい？ アルバニアの王様に助けを求めるか？

いや、無理だ。王様はドノバンと仲がいい。ドノバンの強さを見込んで勇者と認めたのも王様なんだ。俺の言い分なんか、聞いちゃもらえないだろう。

あれ？ 俺、もしかして人生話んだ？ ……う、ううう……。

煉瓦造りの商店が立ち並ぶ街中を、ふらふらと歩きまわる。

そのときであつた。

『かわいそうです……』

「なに？」

突然、女の声が頭の中に響いてきて、俺は仰天した。

あたりを見回す。だが、すぐ近くには誰もいない。悲しいことに、通行人はみんな、俺から距離を置いているのだ。

それなら、いまの声はいつたい？

『ごめんなさい、驚かせてしまつて。でも見ていたら、あなたがあまりにかわいそうで。いま、あなたの心に直接呼びかけています……』

「心に、だと？ 誰なんだ、あんたは！」

『はい。わたしは、魔王カトリと申します』

「まお……魔王!？」

俺はいよいよぶったまげた。

カトリは、確かに魔王の名前だ。

いまから三年前、黄金からモンスターを作り出して、魔王軍を結成し、アルバニア王国へ侵略を開始した魔王。それがカトリだ。

「その魔王が、なんだって俺に声をかけてくるんだ？」

『勇者パーティーの様子を、魔法の力で覗いていたのです。そうしたら、あなたが追放されるところを見てしまって、もう気の毒で仕方がありません。……ルークさん、よろしければ、わたしの城にいらつしやいませんか？ あなたとなら、分かりあえそうな気がするんです』

「い、いや、けれど、俺は人間だぜ？ それに、まがりなりにもつい昨日まで勇者パーティーの一員だった男で——」

と言いながらも、実際のところ、ドノバンへの友情も王国への忠誠心も、俺の中からは消え失せてしまっている。

それに俺には、今夜、泊まる場所もない。飯も金もない。このままでは、野垂れ死にするのがオチだ。

……ならば！

「魔王カトリ。俺、行くよ。その誘い、乗ろうじゃないか」

『わあ、来てくれますか！ よかったっ！ はい、それでは魔法で召喚しますね！』

どうもノリが軽い。

人類の敵たる魔王は、こんな感じの子だったのか。

もっと恐ろしい相手だと思っていたけれどな。

「……うおっ！」

そのときだ。

世界が光り輝いた。

そして気が付いたとき、俺は石作りの部屋の中にいたのだ。

薄暗く、壁には汚れたランプが取り付けられただけの質素な一室。その部屋の中央に、女の子が立っていた。

(続きは本編でお楽しみください)